
旧式頭脳

小松 あきひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旧式頭脳

【Nコード】

N8304U

【作者名】

小松 あきひこ

【あらすじ】

子供の頃、虫取りにいった山で宇宙人と遭遇した晋一は、スーパーコンピューターをしのぐほどの頭脳を与えられる。晋一は若き科学者として数々の功績をあげ、人類の希望を担う存在と言われている。しかし、ある日その頭脳が壊れてしまっただ。晋一は、凡人に戻ってしまうのだが……。

その一

ドンドンドンと激しく戸をたたく音が耳に入ってきた。重い瞼を少しづつ開いていくと、次第にその音が大きくなってきた。

ドンドンドン。

「先生！ 先生！」

ドンドンドン。

「先生！ 矢野先生！」

はっと晋一はわれにかえった。

気づかぬうちに寝込んでしまっていたらしい、ソファーの前のテーブルに無造作に置かれた書類の山がそれを物語っている。晋一はドアに向かって叫んだ。

「はい！。ちよつと待つてください。」

「あの……。田村ですが、原稿のチェック終わりましたので……。」

「

「あ、ありがとう。あとで、声をかけるから」

「はい……。では、部屋で待っておりますので、お声をおかけください。」

「……。」

晋一は、枕で顔を隠しソファーに伏せたまま無言でうなづいていた。

「あの……。先生！。聞いていらつしやいますか？」

いつもの、もじもじとした話し方がやけに気に障る。チエツと舌打ちして返事をした。

「はい。わかっているよ！」

「聞こえていらつしやいましたね。では、後ほど」

田村の足音が消えていくと同時に、晋一は頭の中で整理をはじめた。

自分が直面する、この問題は誰一人として理解できないだろう。

それどころか、真実を語ったところで誰も相手になんかしてくれない。むしろ、病人や狂人扱いされるに違いない。いっそのこと、何もなかったように振る舞うか？ それが出来ればそうするが……。

一体どうしたらいいのか？

晋一は、事の重大さをわかっていながら、眠り込んでしまった自分に苦笑してしまった。まだ笑う余裕があったなんて、いや、笑うしかできなかったのかも。記念講演の開始まで四時間ほど。昨夜から会場である、このホテルに宿泊しているから、欠席なんてできないだろう。どうすればいいのやら。

晋一は、あきらめずに何か良い方法はないか考えてみた。しかし、問題が問題だけに、簡単に策など浮かばない。

講演の原稿も、たしかに自分で書いたのだが今となっては、難しい文字の行列で、頭の中がグルグルと回り始める始末である。

晋一は、腕時計に目をやった。ゆっくりと外すと目の前に持ち上げて、文字盤をトントンと叩いた。

(俺の頭の中は壊れても、こいつは無事かもしれない)

腕時計の中央が三色の光で点滅しはじめた。

「おい！ 返事をしろ！」

「ゴヨウケンヲ、モウシアゲテクダサイ」

短い電子音とともに無機質な声が聞こえた。晋一は、うれしくなつて目の前の腕時計を両手でかいがいしく持ち上げていた。

(お前は、無事なんだな。うれしいぞ。)

「イカガナサイマシタカ？」

「な、おしえてくれ！ 昨夜。俺に何があったのか？」

「サクヤノ、二十一時ノコトデスカ」

「そうだ。何があった。俺になにがあった？」

「サクヤハ、アナタノメンテナンスヲシテオリマシタ」

「そうだ、毎週やってる更新とかいうやつだよな！ で、何があった？」

「ダウンロードハ、シッパイシマシタ。」

「ん？ なんだって！ し、失敗だって！」

「ハイ、ソノヨウデス。」

「じゃあ、もう一度やりなおせばいいんだ！ 頼むから、早く連絡してくれよ！」

晋一は、懇願するように床に膝をつけた。

腕時計は、例の三色の点滅を繰り返しながら小さく振動していた。

その二

晋一は、振動が止むのをじっと待っていた。やがて、点滅がおさまり小さな電子音とともに時計は無機質にしゃべりはじめた。

「ゲンザイチヨウサヲシテオリマスガ、カイフクスルミコミハアリマセン。」

「おい！　じゃあ俺はどうするんだ？」

晋一は、腕時計を睨みつけたまま、ひどく動揺して床をころげ回った。

「壊れた！　壊れた！　頭の中が！」

何度も叫んでは、ころげ回る。

「頭だけじゃないぞ！　心も、俺自身もすべて壊れてしまっぞ！」

どうしてくれる宇宙人ども！」

何度も何度も叫んでいるうちに笑いはじめた。子供の頃のように、腹を抱えて涙を流しながら大笑いしていた。

（天才科学者が、たった一夜にして凡人。いや凡人以下の馬鹿になっってしまった……）

「あははは……　あははは……」

（なんて言えばいい？　しかも今夜は、これまでの僕の功績を讃えるために設けられた講演会だというのに。ありのままを説明すべきか？　僕は、小学5年の夏に宇宙人から頭の中をいじられて天才になっただけなんて、だれが信じると思う？　それこそ馬鹿の上に狂人扱いされるだけじゃないか……）

晋一は、ひとしきり泣き、叫び、笑いつくしたあと天井を見つめていた。

腕時計をつまみ上げ文字盤の光に話かけた。

「お前は、どうするんだ？　ずっと記録係みただったから、そのうちに宇宙に帰るんだろう？」

「ソノヨウデス。マダシジガアリマセンノデ、イマハキロクスルダ

ケデス。」

「そうだろうな。」

晋一は、感慨深げな表情で腕時計に向き直ると、今までの礼を述べていた。

あの日からずっとそばに居て真実を知っている唯一の物？ いや友と呼んでもいいかもしれない。あの無機質な声は好きになれなかったが、そばにいてくれてどんなにか救われてきたものか。

あの日。宇宙人にさらわれた時は本当にビビったけど、気が付いたら何もなかったようだったから、すっかり夢だと思っていたよ。あの日以来、本当に楽しかったよ。この十年余。俺は、日本中の、いや世界中の最年少記録を次々と塗り替えた。神童とあがめられ、どこでもヒーローだった。テレビにもいっぱいでれたし。お金だつて一生かかっても使えないほどたくさんあるんだ。車だつて、家だつて……。

晋一は、想い出話しをおもしろおかしく語ったあと、ふと思いつめた表情で窓の外を見た。

でも、あの日天才なんかにされなかったらどうだったろうか？ 子供の頃は、勉強が嫌いだったから、遊んばかりだった。だから普通に働いて暮らしているんじゃないかな。同じ年頃の友達と馬鹿言い合つてさ。それはそれで楽しいだろう。

時刻は、四時十分。助手の田村に起こされてから、かれこれ一時間近く独り言のような会話を、この時計にしていたようだった。時刻は少しづつ迫ってきてるけど、なんだか落ち着いてきた。

以前、自分なりにこういう事態を予測したことがあった。その時は、本当にこうなるとは思っていなかったが、今、まさにその時になつてしまったからには、その時に考えたことをも参考にすべきだと当時のプランを思いだそうとした。

たとえ頭の中の何かが壊れたとしても、これまでの十年余の経験などはなんとなく身に付いている。人の前に出ることだつて、堂々としたものである。

この時計が以前言っていたことを思い出した。

それは、数式や理論や記憶は、ある種の切り札であって、それだけでももちろん凄みはあるが、実はそれらを巧みに使いこなすことこそが大事であると。それらを駆使する人間力が重要だというのだ。晋一は、その助言に従い学び行動してきたつもりである。そして、自らが学んだことは忘れてはいけないのである。

晋一は、ソファから身を起こし受話器をとった。外線のボタンのあと、実家の番号を押した。数度の呼び出し音のあとに聞き慣れた声がした。

「母さん！」

「もしもし。晋ちゃん。」

「うん。俺だよ。」

「どうしたの？ 今夜は忙しいんじゃないの？」

「うん。今はちょっと時間が空いたから……」

「どうかしたの？」

「いや、なんでもないよ。」

「本当に？ 何かあったんじゃないの？」

さすがに母親の勘は鋭い。どことなく違う様子がわかるのだろう。

「大丈夫だよ。すぐに解決するから。」

晋一は、精一杯の嘘をついた。

「本当に大丈夫なの？ ちょっと心配したけど。」

「うん。心配しないで。」

「あ！ そうそう、昨日届いたわよプレゼント。素敵な物をありがとう。本当にうれしいわ！」

晋一は、昨日の母の誕生日にプレゼントを送っていたことを思い出した。

「晋ちゃん。お母さんの歳。一つ間違えてたわよ。」

「え！ そんなあことないよ。」

「いやだわ、お母さんは昨年から歳を取らないように決めてたのよ

！ あははは……。」

くつたくのない笑い声が受話器から聞こえてきた。

「母さん。」

「なに？」

「親父も弟も元気？」

「みんな、とても元気よ。本当にあなたのおかげだわ。ありがとう。」

「

「……」

「晋ちゃん。どうしたの？ 本当に大丈夫？」

「うん。大丈夫さ。心配しないでよ。」

「本当なのね。なら心配しないわよ。」

「じゃあ、そろそろ打ち合わせだから。切るよ。」

「ねえ、晋ちゃん。」

「うん？」

母の優しい声に、込み上げる熱いものを感じ、泣き出しそうになるのを耐えながら、短く返事をするのがやっとだった。

「晋ちゃん、もう普通に帰っていいのよ。充分すぎるほど、あなたのおかげでみんな幸せなんだから。一人で、あなた一人で無理しなくていいのよ。」

「母さん。ありがとう、また電話するから。」

母の肩に優しく手をかけるように受話器を戻した。

母の声は優しくかった。何も言わなくても、伝わってしまうのだろう。いくら強がってても息子だからかな。やっぱり甘えてしまうんだと思うと、優しい言葉が聞きたかっただけじゃないけど、帰る家があるんだと思うと、勇気が湧いてきた。

今夜、自分でケリをつけるんだと。

その三

晋一は、再び受話器を取り電話をかけ始めた。これからの自らの行動によって影響を受ける方々に。後日の訪問を伝えるために。

時刻は、17時40分。

最後の電話を切ると冷蔵庫の水を一気に飲み干した。

何かやり残したことはないだろうか？ しばらく考えた。

腕時計の文字盤をトントンとたたきながら、

「おい。ちゃんと記録してるか？」

「ハイ。リヨウコウニキロクヲ、ツツケテオリマス。」

予想した通りの、わかりきった答えだった。

「そう言うだろうと思ったよ。」

と、苦笑しながら続けた。

「これからのことは、特にちゃんと記録してくれよ。」

「トクニ？ チャント？ キロクセツテイハモンダイアリマセン。」

晋一は、クツクツと笑いをかみしめていた。

ドンドンドン。

「先生！ 先生！」

ドンドンドン。

「先生！」

と、田村が呼んでいる。

「田村です。ずっと待っておりますが、お声がかからないものですから。心配で……。」

「ちようどよかった。田村君。」

「はい？」

晋一は、ドアに駆け寄りおもむろにドアのレバーを引いた。そこには、ア然とする田村が立っていた。

「……。先生、準備のほうはいかが……。」

晋一は、田村の言葉を遮るように

「田村君。原稿だけど、変更するよ。」

「え！ では違う原稿を？」

「うん。そつだよ。」

「では、主催者側に早くお見せしなければ……。」

「うん。わかっているが、原稿はないんだよ。」

晋一は、自らの頭を指さし、

「原稿は、ここの中にあるんだよ。」

と、まるで悪戯っ子のような仕草で言った。

「ん？」

田村は、怪訝そうな目をしていたが、これまで失敗をしたことがないからか。安心して、確認するようにうなずいた。

「先生もお考えが、おありでしょうか。おまかせいたします。」

「うん、ありがとうございます。主催者に、その旨を伝えてくれないか？」

「はい、かしこまりました。」

田村は、返事をしたが、まだ何か言いたそうなそぶりで突っ立っていた。

「田村君、まだ何か？」

「先生。お預かりしております原稿は？」

田村は、いつもの要領を得ない顔つきをしていた。

晋一は、彼の表情を見て考えていることを察し、彼の思うようにしてやるうと考えた。

「あの原稿は、君が処分してくれ。処分だから、君の好きなようにしてくれ。」

「好きなようにですか？」

「そつだよ。必要ならば、持って帰ってもいいけど……。」

田村は、晋一が言いおわらぬうちに、

「あ、ありがとうございます。」

と、うれしそうにその場を後にした。

時刻は18時25分。

そろそろ会場への案内係がくる時刻である。

晋一は、他に打つべき手はないか？ 漏れはないかと考えていた。高鳴る鼓動を鎮めようと静かに目を閉じた。目に浮かんでくるのは、小さな頃、川や山で遊んだ時の風の香りや水の冷たさだった。

天才少年と世間から騒がれてチャホヤされる以前のことばかり。

暑い夏の日差し。木々の匂い。

しばらくすると、案内係が迎えにきた。晋一は、ソファから立ち上がり、ゆっくりとドアを開いた。

「お待たせしました。」

「博士、お迎えにあがりました。」

「ありがとうございます。」

「博士。こちらへ」

晋一は、案内係の後を、ただ黙ってついていった。

長い廊下を歩き、エレベーターに乗り込む。その間、一言も口を開かずにはいた。何度も深呼吸を繰り返す。エレベーターから出ると会場の正面の入口が見えた。華やかな雰囲気伝わってきた。あちらこちらに花が飾ってある。受付には、研究所のスタッフが忙しそうにしていた。

晋一には今夜の、この花束や華やかな会場が最後を飾る舞台に見えた。しばらくは、華やいだ世界ともお別れだと思った。何度ともなく見てきたこの景色。今夜は、初めて疎ましく思えた。

控室は、会場となる大広間の反対側に位置するせいか、静かなところだった。なるほど、一流のホテルとなると、控室の場所にも配慮があるのだろうか。いままで、気にもしたことを考えた。考えていた。チツチツチツと腕時計の秒針の音だけが心を落ち着かせてくれる。

晋一は、もう一度これからのことを頭に描いた。時刻は迫ってきているが、出来る限りゆっくりとシュミレーションを始めた。

トントントン。

「先生。田村です。」

田村が晋一を呼びに来たらしい。

「先生。お迎えにあがりました。」

「はい。」

晋一は、時計に目をやり大きく深呼吸をした。

思えば、この田村という、なんだかオタクっぽい学者が助手になって3年になるが、どうゆう男なのかはつきりとわからない。この十年余の時間があまりにも急激なせいか、他のことに関心を持つ余裕もなかったのだ。多忙だったせいだけかな、あまりにも関心をもたなすぎた。せめて身近に居る人達のことだけでも知ろうとしなかったことに、なにをしてきたのだろう？ と、あきれてしまった。あらためて、目の前に居る風采の悪い田村の姿を見た。たしかに関心をもとうとは思わないよな、と一人で納得してしまった。青白い顔にボサボサ頭。でっぷりとした腹を無理にベルトで締め上げている。ズボンは裾が短く、大きな靴とくれば、まるでアニメのキャラクターのようである。

晋一の視線に気づいたのか

「先生、何か？」

「いや、何も……」

晋一はバツが悪そうな表情で返した。

「先生、今夜のスピーチの件ですが。先方には原稿の変更を伝えてきましたので。」

と、田村は、いつものあのモジモジとした話し方で要件だけを述べる。

「あ、ありがとう。そうでしたね。」

「先方様も『期待しております』との事でした。」

「そうですね。田村さんご足労をおかけしました。本当にありがとうございます。」

晋一があらたまって礼を言ったことに驚いた表情で

「先生、今夜はなにかありましたか？ いつもと様子が違うようですが？」

「いや、何も無い。今までは……。」

「今までは……。ですか？」

「……。今夜から変わる……。かも？」

「え？ 何かが変わるのですか？」

「田村さん。今迄ありがとう。いろいろとお世話になりました。」

「？ 先生、どういうことでしょうか。」

晋一は、田村に向き合いおどけたような顔をした。

「これからも、世話になるかもしれないかな？」

「先生、もちろんですよ。」

田村も今夜の晋一の不思議な態度に誘われるように軽い返事をしたが、

「でも先生。今夜は少し様子が……。いつもと違うようです。大丈夫ですか？」

心配そうな顔をしていた。

そんな田村を気にもせず、晋一は歩き出した。ゆっくりとした足取りで、一步一步と慎重に……。

その四

会場の近くに来ると大勢の人々の熱気が漂っていた。梅雨もまだ明けきらぬ湿度の高さに、さらにこの熱気で空調設備が悲鳴をあげている。晋一は、会場の正面のドアの前で田村と別れた。晋一の前には、ドアを開く者が左右に一人づつ待機している。ドア越しに聞こえてくる司会者の声は、何やら大げさな言葉をならべたてている。晋一は、自分が置かれている状況が滑稽でならなかった。まるでサーカス小屋のピエロの登場のような感じがする。いつものように正面のドアが開き、スポットライトを浴びながら登場するんだ。右手を軽く掲げて場内を練り歩くさまは、人形劇の主人公のようだ。そこに居るのは、僕であって僕ではない。今の僕は、世間が作りあげた偶像なのではないだろうか。

あの日、小五の夏休みに宇宙人から埋め込まれた頭の機械のおかげで、神童と呼ばれるようになった。何でも一目で記憶することができた。百科事典を何十冊と丸暗記して皆を驚かせ、やがて僕はテレビのスターになった。どんな語学も瞬時に習得できた。どんな学問も数式も化学式も……。

今では、数多くの博士号と数百にもぼる特許に、莫大な富。何もない生活をしている。もちろん国家からの手厚い保護も受けている。若干、二十二歳の若造なのに。

でも、自分で望んだ生き方じゃない。僕は、ただ回りの大人達から言われるままに記憶し、計算し、理論を構成しただけなんだ。まるで不思議な生き物を見るように実験されていた。身体のおちこちに計測機器を取り付けられたりもした。

僕の回りには、いつも大勢の大人達がいた。僕は商品なんだろう。ビジネスチャンスだと思って集まる人々にとって僕の感情など知ったことではない。結局のところ、彼らに振り回されて生きてきたんだ。そのあげく、昨夜更新に失敗して僕は、ただの僕に戻ってしまった。

った。誰も信じてはくれない真実を、語ることも出来ない僕に戻ってしまった。

そして、今迄の夢物語を、ただの僕が、僕の意志で終わらせなければならぬ。こんな皮肉なことが滑稽でないはずがない……。

目の前が眩しくなった、いつの間にかドアが開いてライトに照らされていた。場内からは、拍手と歓声が怒濤のように迫ってきた。晋一は、いつものように右手を軽く掲げ、ゆっくりと中央のステージにむかった。今夜は、特別なつもりだからいつもよりもゆっくりと歩いた。顔見しりや世話になった方々にはその都度会釈をしながら。

晋一は、マイクの前で両手を掲げ場内の歓声にこたえた。コップの水で咽を湿らすとマイクの前についた。場内は、それを合図に静寂を取り戻した。

挨拶のあと、今夜のパンフレットを右手でつまみあげて、咳払いをした。

「みなさんのお手元にあるこのパンフレットですが、お手元に、ございますか？」

場内には、紙をめくる音があちらこちらでしていた。

「そうです。受付で渡された封筒の中にあります。」

前列に座っている男性の手元の封筒を指さした。男は、封筒を持ち上げた。

「その中に入ってますよ。皆さんもおわかりになりましたか？」

場内のあちこちでパンフレットを取りだして顔を見合わせている。「皆さん。このパンフレットですが。」

晋一は、再びパンフレットを右手でつまみあげた。皆がその右手に注目していたその瞬間。晋一は、右手をパツと開きパンフレットを床に落とした。場内がどよめいたのを確認して、

「今夜は、このパンフレットは捨ててください。」

あっけにとられた場内の空気を制するように続ける。

「そう、今夜は、肩書や経歴を取っ払う。私、矢野晋一。人間、矢野晋一としてのスピーチをさせていただきたいと思います。」

場内は、晋一の意に反して大歓声が上がった。パフォーマンスだと思っっているのだろう。

晋一は、歓声を右手で制して、話を続けた。

「古来、科学技術は我々人間の生活に深く寄与してきたことは、衆知の事実であります。あらゆる分野の学問は人々の生活をより豊かにそして便利にしてきたことは、私を含め学術を研究する者としての誇りでもあります。しかしながら、その技術は、我々の生活を脅かすことに使われているのも事実です。」

少し目まいがしてきた。きっと暑さのせいだろうと思い、水をゴクリと飲んだ。気合いを入れるために。

「二十世紀から今日にいたるまでの、急激な科学技術の進歩の中で、偉大な先人達もその憂いを抱きながら没していきました。今日の多くの科学者達もその想いは同じであります。」

晋一は、次の言葉を発するまでに少しの間を置いた。マイクから少し顔を離しながら最前列の人達に向けて笑顔でうなずいた。それは、これまでも何度かスピーチで見せたことのある仕草。いよいよ核心に迫るときの癖であった。

「あらゆる研究の最大の目的は何でありましょうか？」

両手を掲げて聴衆に問う。

「その答えは、人間が人間らしく、そしてこの世界から戦争や飢餓を取り除くためではないでしょうか！」

晋一の迫真のパフォーマンスに場内は歓声の渦に飲み込まれていた。

再び右手をあげてマイクに近づいた。身体中が上気して汗が噴き出していた。ゆっくりと場内を見渡すと、先ほどとは別人のように物静かな口調で話し続ける。

「ところが、悲しいことに。これまで我々が発見や発明してきたものの中から、既に軍事転用が進んでいることを知りました。私は、

そのことに激しい憤りを感じました。本当に悲しいことです。しかし、どうすることもできないのです。」

晋一は、来賓席の男性を指さした。

「そう、あなたがもし多くの人を殺す機械の製作に手を貸して、多くの子供や女性や老人が殺されていたとしたら？」

さらに他の席を指さして、

「そう、あなたがもし、自分の知らないところで多くの人々を殺すことに協力していたことを。知ってしまったらなら？」

晋一は、肩を落としたりした。

「とても……とても、不幸なことです。」

場内は静まりかえり、次の言葉を待つていた。

晋一は、顔を正面に向けて穏やかに語りだした。

「私は、考えました。どうしたらいいのか。そして、私なりの答えを見いだしました。」

場内は、その答えを聴くために晋一に視線を集めた。

「私は、今日までの研究成果及び継続中の研究のすべてを放棄いたします。そして、研究者としての私は、今夜をもって引退いたします。」

場内は、驚いた。誰も予想していなかった答えだったからだ。

まだまだ若い世界一の頭脳とも呼ばれる科学者が、突然引退を宣言するなんて。とくに、関係者の慌てようは尋常ではなかった。騒然とする場内に切り込むように晋一は叫び続けた。

「悲劇を……。このような悲劇を繰り返さないために必要なのは、教育です。」

まだざわついていた場内も晋一の声を含図に静かになった。

「あらゆる分野の研究も一流の知性の上に成り立ち、そして、その成果は、一流の知性を持って正しく使いこなせなければならぬのです。そのためには、正しい倫理感と哲学を持つ者たちが多く育ていくことが急務ではないでしょうか。」

場内は、賛否両論だった。

「そして、私はすべてを教育事業に捧げます。」
晋一は、達成感を得ていた。なんとかシナリオ通りにスピーチができたことに。

場内のようすなど、見向きもせずこれから具体的にどうするべきかと頭のなかで考えていた。今夜は、やけに疲れている。明日から考えることにしようと、決めて場内を見渡した。

身体中が汗でびっしょりと濡れている。ライトのせいなのか、目まいがしてきた。早くシャワーを浴びたい、早くここから立ち去りたい……、と思ったのが最後の記憶だった。

その五

晋一は、雲の上をふあふあど漂っている夢を見ていた。優しい光に包まれ、ゆったりとただよう。今迄の、多忙な日々が嘘のようだ。下を見れば、豆粒ほどの人間たちが、忙しそうに働いていた。田村がいる。教授がいる。研究所の人達がいる。晋一は、笑顔で手をふっていた。

「先生！ 先生！」

何度も呼ぶ声がしていた。

その声は次第に大きくなってきた。まるで耳元で呼ばれているように。晋一は、声の方向に顔をむけた。そこには、鬼の形相の田村がいた。

「先生！ 講演が台無しですよ！」

田村は詰め寄ってきた。すさまじい形相で……。

「やめてくれ！ やめてくれ！」

晋一は、飛びかかってきそうな田村にむかって叫んだ。

「やめてくれ！ やめて……。」

ふっと目を開いた。

（夢だったのか？）

ハッと、我にかえって辺りを見渡した。

（ここは、どこだろう？ あれからどうしていたのだろうか？）

記憶の糸をたぐり寄せるように思い出そうとしていた。

（スピーチの最後に気を失ったんだ。ここは病院なんだろうか？）

（病室にしては広すぎやしないか？）

晋一は、上下左右が白一色の大きな部屋の真ん中のベットに寝かせられていた。病室にしては、窓もテレビもない。それ出入口が見当たらない。天井には、ライトが一つ晋一を見据えるようにピカピカと三色の光を燈していた。こんな病室もあるのだろうか、納得

するしかなかった。体は重く動かない。頭痛のせいか頭を動かすたびに鈍い感覚があった。

まだ体を起こす力もないが、身につけている物だけは確認できた。入院患者が着用するような着衣だった。

(やっぱり入院させられていたのか)

そう思うと、重い瞼を再びおろした。

どれくらい寝ていたのだろうか。人の気配を感じて目を開くと足元に医師らしい一人の男が立っていた。

「お目覚めになられましたか。起こしてしまっただようですね。」

どこかで見たような顔であった。

「頭痛はいかがですか？」

晋一の顔を覗きこむように近づいてきたので、まだ重たい頭を医師のほうにむけた。

「これで楽になりますよ。」

医師は、バーコードを読み取る機械のような物を頭に向けて、まるでレジにでも通すように赤色の光線をあてた。かすかな電子音が耳に残った。

「どうですか博士。」

医師の言う通りに、みるみる楽になっていった。

「本当にすごく楽になりました。ありがとうございます。」

晋一は、少しづつ体を起こしながら部屋中をみわたした。

(……………？ 病室には不自然だ……………)

白衣の男は、晋一の様子を知った上で枕元の機器のデータを手持ちの機器に入力していた。

「ここは、病院ですか？」

単刀直入に尋ねた。

「そうです。ここは病院です。」

男は、あっさりと答えた。手元の機器から目を離すこともなく。

「そうですか。しかし広い部屋ですね。」

「そうですね。特別室ですから。」

男は、笑顔を向けて答えた。まるで子供を諭すように。

「先生、でも。この部屋、窓がないですね。出入口もどこかわからない。」

晋一は部屋中を指さしながら、

「病室ならテレビだってあるでしょう？」

さらに男に質問する。

「どこの病院ですか？ 電話はどこに？」

（これも、まだ夢の中なのか？）

「まあ、博士。まだ体を起こすこともままならないでしょう。もう少し横になられてください。」

（どうも怪しい。ここは、一体どこなんだ？）

納得のいかない表情で、まだ完全に動かない体で、必死に抵抗する姿勢を見せた。男は、予想通りの晋一の反応に驚くこともなく、穏やかな口調で安心するように言い続けていた。

晋一は、ふらふらとする体を無理にで起こそうと必死にもがいた。その姿に男は、これまでの経緯を説明することを約束した。晋一は、体の緊張を解き男を凝視した。

「博士。博士は私と初対面ではありません。見覚えのある顔だと認識されているのは分かっていますよ。ただ、誰であるか確信が持てないから、記憶違いではないかと思われたのでは？」

（やはり、そうだったか。一体誰なんだ？）

「よく見てください。そう、よく見ていただけますか？」

（ん？ 最近あった人のようだが？）

「講演の会場への案内係。ほら、私ににいていませんか？」

「あ！ そうだ。あの係の方だったんですか？」

記憶の奥の扉が開く安堵感と湧きあがる不信感を覚えた。

（どういうことなんだ？ ここは、ホテルの関係の病院なのか？ まさか、ホテルの中なのか？）

「どづいつことなのでしょうか？」

晋一は、訴えるような目で聞き続ける。

「もっと、理解できるように話していただけませんか？」

男は、混乱する晋一に向き直り、順を追って話しはじめた。

晋一が講演中にたおれて、運びこまれるまでのことが詳細に伝えられた。

（ここまでのことは、分かったが、一体ここはどこなんだ。そして、この男は何者なんだ？）

「少しは理解できそうですが……。」

「ここがどこか？ ですよ？」

男は、晋一が言い終わらぬうちに言葉をかぶせてきた。腕組をして天井を見上げながら。

天井から三色の光線が不規則に点滅しながら男を照射しだした。

SF映画のシーンのような不可思議な世界に晋一は、あっけにとられながら見つめていた。

（もしかしたら、あの宇宙人達なのか？）

（僕の頭を直すために、ここに運んだのか？）

やがて男は、しばらく待つように晋一に言い残して部屋から消えた。

（やっぱり宇宙人達だ。よかった、頭を直してくれるぞ。たぶん直してくれると思うが……）

ただっ広い部屋に一人残された晋一に天井の光が点滅を始めた。

時折、光線が体を射抜くと、何やら心地よさを感じた。あの少年の頃の風景を思い出した。

その六

男が小さなワゴンを押して戻ってきた。ワゴンにはサッカーボールほどの大きさの物体が、黒い布をかぶせられてのせられていた。

（いつの間に来たんだ？ どこから？）

晋一は、男がどこから入ってきたのかが知りたくて、男の背後ばかりが気になっていた。

「博士。お待たせしました。」

晋一は、うなずきながら男の手元を見た。

（何だろう？ 機械なのか？）

「博士、少し驚かれると思います。ご覧ください。」

男は、言い終わらねうちに、ワゴンの黒い布を取った。

「あ！！ く、首！」

そこには、なま首が一つ置かれていた。

（な、なんなんだよ一体！ 冗談じゃない！）

男は、顔をそむける晋一にワゴンを近づけて見るように促した。

晋一は、恐る恐るそのなま首を見た。目を閉じて額に穴が開いていた。口は真一文字に閉じられて……。

（あ！ た、たむらだ！ 田村じゃないか！）

晋一は、体をのけ反らせながら、声にならない声を発した。

「ああ……。し、しんでいる……。」

「博士。落ち着いてください。」

「……。な、何を言ってるんだ！ 田村の首を、首を。み、見せられて……。何を言ってるやがる！」

男は、晋一を無視してワゴンのなま首と一緒に置いてある腕時計を手に取った。

（田村の腕時計だ……。）

天井から腕時計に、あの三色の光があてられた。男は、腕時計をなま首にちかづけた。

晋一は、顔をそむけながらも見ていた。

なま首は、突然目を開いた。

(あ！目が……。目が開いた！)

目玉をキョロキョロと口を不規則に開いたり閉じたり。まるで生きてるように動きだした。手品を見ているようだった。

男は、なにやらブツブツと言いながらなま首を持ち上げた。付け根から銀色の管が見えた。

(まさか？ ロボット？)

「博士。ご覧になってますか？」

晋一は、無言でうなずいて男の手元を凝視していた。

「もうおわかりでしょう。これは、機械なんです。」

「……。」

「形式はHR-45Mの改良型です。特性は……。」

まるで家電製品を説明するように話しはじめたが、

「そうですね。説明などには必要ないですよね。」

「つまりは、ロボットなんですよね？ 田村はロボットだったんですね。」

「そうです。」

男は、田村の頭をワゴンに戻した。あの光線が男の手元の腕時計を照射する。キョロキョロと動いていた目は止まり瞼を閉じた。口を閉じ、眠っているみたいに呼吸をしている。

「博士、この額の傷がわかりますか？」

「はい。ちょうど真ん中のところですか？」

男は、額の傷口を開いて見せた。銃撃されたような傷だった。

「これは、狙撃された傷ですよ。よほど腕の良い奴でしたね。しかも、必ず死ぬように口径の大きな銃を使っているんですよ……。」

「説明してください。わかるように……。」

男は、うなずくと改めて向き直った。

「では、本題に入りましょう。博士ならば理解できると思います。」

男は、天井の光の点滅に合図を送るようになに目配せをして話した

した。

話は、晋一の想像をこえるものだった。

この男達は、400年後の未来からやってきたと言うのである。400年後の地球は、現在とは比べようのない程に環境破壊が進んでおり人類が住める場所も僅かになり。いずれは地球を、離れなければならなくなっていると言うのだ。そして、未来の人類は地球の滅亡を憂いて、現代に何らかのメッセージを送ることにしたというのである。

今日の地球温暖化はやがて地球を滅亡へと追い込んでいくことが確実であるという。

彼ら未来人は、それを阻止するために現れたというのだ。彼らは、新しいエネルギーの原理を現代に伝えるために晋一を天才科学者にした。

その成果は、ゆつくりとはあるが着々と現れはじめた。これまでに晋一が発表した理論は世界中で研究が進められており、やがてエネルギー革命とまで呼ばれるほどの変革が起こるであろうと言われていた。

しかし、この変革を快く思っていない連中が数多く存在する。

彼らは、莫大な富を背景に国家をも操り、自らの利益を守るために暗躍しているのである。

晋一は、彼らの敵となり標的となった。その動きを知った未来人は、意図的に晋一の頭の活動を止めた。晋一を暗殺者の手から守るために。そのために、晋一は2年間眠らされていたのだ。

晋一が倒れたあと、田村が研究を引き継いだ。田村は晋一の研究成果を精力的に伝播した。そして、標的とされ凶弾に倒れたのである。

なるほど、男は晋一に理解できるように分かりやすく、説明してくれた。しかし、その内容に矛盾を感じるところもあった。晋一は、

その疑問を口に出さずに男の説明をもう一度頭の中で整理をはじめた。

「博士。おわかりになりましたか？」

「……。少しは……。」

「そうですね。突然こんな話をされてもですね……。私でも驚いてしまいますよ。」

男は、半信半疑の晋一の顔を予想していたのだろう。しばらくはここでゆっくり養生しながら理解していけばどうですか？ と、言っ
て部屋を出て行った。相変わらず消えるように立ち去っていった。

晋一は、なすこともなくベッドに横になった。驚いたことに、今迄なにもなかったベッドの脇にヘルメットのような、ヘッドホンのような物があった。先ほどの男がニユースや音楽を見れるようにします。と、言っていたが。どうやらこれなのか？ 恐る恐るつけてみた。晋一は一人驚きの声をあげた。これが、未来の情報端末なのだろうか？ チャンネルもスイッチもまましてやディスプレイがない。頭に装着して脳にじかに信号を送るのだろう。操作もすべてイメージするだけでいいなんて。

晋一は、自分が倒れた時からの映像などを検索しつづけた。

その七

晋一は、必死に検索を続けた。新聞やニュース、ネットの書き込みからワイドショーにいたるまで。

男の話は、本当だった。もちろん、田村がロボットだったことや、未来からきた人達のことには知られてはいないから報道されてはいないが。狙撃のシーンやエネルギー政策のことなどは、多くの番組で取り扱われていた。

だが、最初に感じた矛盾にたいする答えは見いだせなかった。

(エネルギー理論の変革が目的ならば、僕自身が凶弾に倒れたとしても目的は果たせたのではないか？ なぜ、身代わりに田村がいや、あのロボットが？)

彼らの目的は、他にあるのではないか？ 晋一は、考え続けた。

(一体、他になんの目的があるのか？)

「お願いだ！ 誰か出てきてくれ！ 教えて欲しいことがある。」
天井に向かって叫んだ。すると、足元に、先ほどの男が立っていた。

あつ！ と、晋一の驚く顔を見て微笑しながら近づいてきた。

「ど、どこから……？」

「ご質問は、そのことですか？」

男は微笑をたやすことなく、穏やかな口調だった。

「いや、聞きたいことはいろいろありますが、もちろんどうやって出入りするのかも聞きたいです。」

男はおどけた素振りです。

「では、質問に答えてから、後で、出入りの秘密のヒントを教えましょう。」

「そ、それでは、まず……まず……。」

晋一は、言葉を選んでいった。質問の仕方によっては、答えの意味が変わってしまうこともある。どうして僕を生かしているのか？

それを聞きたいのだ。

「僕は、これかれどうすればいいのですか？」

「博士。さすがに聡明な方ですね。」

「いや、ただ、これからどうしたら……。」

「そうでしょうか？　ちゃんと顔にでてますよ。矛盾を感じてると。」

「

……。」

「博士は、その矛盾点を質問することを避けて、そのように聞かれ
たんですね。」

晋一は、黙ってうなずいた。

(何もかも見透かされている)

「博士。大丈夫ですよ。我々は味方ですから。何でも素直に聞いて
ください。」

(どうする？　もう聞くしかないだろう)

晋一は、目を閉じて深呼吸をした。

「では……。なぜ、僕を生かしているのですか？」

「なるほど、ご自身のこれからの役目を聞きたいと。次はなにをさ
せられるのか？　何をしなければいけないのか？　それが、生
きていることの条件だと思っているのでしょうか。何もなければ、わ
ざわざ助ける必要がないのでは。と、そういうことでしょうか。」

晋一は、うなずくことしか出来なかった。何もかも彼らは知って
いる。知り尽くしている。

「博士、私には、その質問の答えが出せない。その答えは、別の方
がきますので。その方に聞いてください。」

男は、言い終わるとすぐに天井の光の方に合図を送り、立ち去る
うとした。

「博士。出入口を知りたいんでしょう。よく見てください。」

晋一は、男を見ていた。一歩後退する男を凝視していた。その瞬
間、いなくなつた。ア然とする晋一は、両の目をこすり、まばたき
をしながら男が消えた壁面を見た。そこに、大男が二人と男たちの

背後に一人の女性が立っていた。

驚く晋一に女性が優しく声をかけた。

「すみません。おどろかせてしまって。」

女性は会釈しながら二人の大男の間に入り、彼らに距離を置くように促した。どうやら、二人の大男は、この女性の警護の者であろうと思われる。女性は、男達の耳元で心配ないから少し離れるようにと声をかけた。女性もまた、先ほどの男と同様に絶えず微笑んでいた。

（警護の男達のようにすと、この女性の雰囲気ならきつと地位の高い人だろう。）

「お体の方は、いかがですか？」

「もうずいぶん良いです。お気づかいありがとうございます。」

「まだ少し体が重たいようですね。充分休養を取られてください。」

女性は、晋一を労うように声をかけた。

（さっきの男は、この女性に質問しろと言っていたが？）

「博士。先ほどの疑問にお答えするために、伺いましたので。どうか不安にならなくて結構ですよ。」

（またしても、お見通しだ。）

「はい、ではお答えをいただきたい。」

晋一は、姿勢をただして質問をぶつけた。

「もう一度聞きます。これから僕になにを、一体なにをさせようとしているのですか？」

女性は、うなずくと重複するところもあるが、最後まで聞いて欲しいと、前置きして語りだした。

「ここに運び込まれるまでのことは、もうご存じだと思います。」

「はい。ここまでのことは。」

「そうですね。で、これからのことを知りたいんですよね。誰しも知りたいと思うでしょう。無理はありません。」

「……。」

「博士。」

女性は、晋一に優しく声をかけた。

「博士には、とても大事な使命があります。」

「とても大事な？」

「そうです。でもそれは、特別なことを強いるものではなく。より自然に普通に……。」

「自然に？ 普通に？」

「はい、そうです。」

「で、私に何をしろと？」

問いかけにすぐに答えずに、女性は晋一の顔を凝視していた。

「やっぱりだわ！ 目元が、私の母に似ています。なんとなく面影が……。」

晋一も、女性の目元を覗きこんだ。

「そうですか？ 僕にはわかりませんが。」

晋一は、女性の言葉の意味を悟った。

（つまり、僕がこの女性の祖先なのか？）

考えこむ晋一の表情を確認すると、

「博士。おわかりになりましたね。博士は、私の祖先なのです。」

（そうか、だから僕が死んではいけないかったのか。それで助けたのか。）

「博士は、数年後に結婚して子供を授かります。それが使命なのです。」

晋一は、今さらながら、自らの運命に驚いた。

「他に何か？ しなければならぬことは？」

「僕の頭の機械は？」

「いつ元の世界に戻るのか？」

次々に発する質問に、女性は根気強く、そしてわかりやすく答えてくれた。

あと二か月ほどで戻れること。頭の機械は消滅して、今後は普通の知能であること。特別に何も行動する必要がないということであ

った。そして最後に、こう付け加えた。

「博士は、教育に力を入れようとされた発想には、大変驚き、そして、同感いたしました。最後のスピーチはとても素晴らしいものでした。是非、教育事業を進めてください。」

晋一は、最後のスピーチをほめられてうれしかった。機械が壊れた僕の頭で考えたんだ。さっき見たニュースでも悪くない評価だったが、目の前で、素晴らしいといわれたことが、格別うれしかった。あのヘッドホンのような端末で見て、倒れてから経緯は知ることができた。教育事業は、父たちが中心になり、設立した財団によって精力的に活動をし初めているところである。

そうだ、僕には自らで決めた使命があったんだ。そう思うと、体の奥からふつふつと湧きあがる力を感じた。

（僕は、何としても。力の限りに闘い続けるんだ！。）

晋一の決意みなぎる姿に女性は笑顔で答えた。晋一もニツコリとほほ笑んだ。本当にうれしかった。目標を、生きる目標を失った者にとって。その目標を得たときの喜びは、なにものにもかえがたいものである。しかし、目標を得たとき、人はそれが達成できるだろうか？ と、不安にも思うものである。

「僕のこの先は？ どうなるのですか？」

未来のことを尋ねた。

「博士。それを聞いてどうなるのですか？」

女性は諭すように続けた。

「今を生きる人々に未来のこと。とりわけ具体的な人の将来を話したところで、何の意味があるのでしょうか？ 例えば、明日死を迎えることが分かったところで、今日が何かかわりますか？ 今日なすべきことをせずに死の恐怖に怯え、そして、死を免れることばかりを考えて生きなければなりません。」

晋一が口を開こうとしたとき、女性はそれを制するように手のひらを突き出して話し続けた。

「確かに、現在を少し変えて危険を避けることができなわけはあ

りません。不可能ではない。しかし、それには大変なリスクが伴います。歴史は、そう簡単に変わるものではないのです。」

「しかし……。」
「博士。我々が現れた目的は理解できたはずです。それにしては、遠回りな方法だと思いませんか？」

「……。」
「もっと簡単にできたはずだと。」

「それも、聞きたいと思ってました。」

「よく考えてください。我々は歴史の軸を変えられないのです。だから、現在の人々が自発的に気づくようにメッセージを送る方法しか出来なかった。池に小石を投げて、その波紋を見届けるように。」

「そうですか……。」

「博士。おわかりになりましたか？」

「……。」

「今を生きる人々。今を精いっぱい生きる人々にとって、未来の結果だけを知ることには何の意味があるのでしょうか？ たとえどのような結末だろうとも、希望をもって今を生きることが、どれほど有意義なことでしょうか。」

晋一は、女性の言うとおりでと思った。そして、もう先のことを知るうなどとはするまいと思った。

「博士。博士の教育事業は順調に進んでおります。そして、博士の帰りを待っています。」

「はい、そのつもりです。」

「我々は、博士の力を借りて現在に小さなメッセージを送ることしかできませんでした。歴史は急激な変化を望んでいないからです。急激な変化は必ず、その反作用によって急激に衰退していくものです。」

「はい。」

「歴史の流れは強力です。その流れを変えることが出来るのは、現在の人々なのです。我々は、そのヒントを送ることだけです。そし

て今、その波紋は大きな成果を上げ始めました。」

女性は晋一の目を見て力強くうなずいた。

「新しいエネルギーの研究は世界各地で進んでいます。さらに、博士の教育事業は世界のため、科学技術の発展のための後押しをするようになるでしょう。」

「未来の地球は、救われるのでしょうか？」

「そうだと思います。あらためて博士には、お礼を言わせていただきます。ありがとうございます。」

晋一は、どう対応していいかわからずに、とまどっていた。

「今後の博士の活躍を期待しております。」

「はい。全力で取り組みます。」

女性と晋一はともに笑顔でうなずいていた。

「それでは、博士。私はこれで失礼します。あと二カ月、ゆっくりとされてください。」

「はい。ありがとうございます。」

(あと二カ月……。早く戻って仕事がしたいが。)

「博士。もう一つ質問があるでしょうか？」

「いや……。何も。あ！そうでした。この部屋の出入口はどこですか？ どうやって出入りされるんですか？」

女性は笑いながら答えた。

「出入口はここですよ。では、失礼いたします。」

女性と二人の大男は一瞬にしてきえていた。

晋一は、アツ気にとられながらも苦笑していた。ここに来て気がついてから何度驚き続けているのだろうか？ 出入口のことさえわからないのだ。未来のことなどわかるはずがない。とにかく、あと二カ月どうやって過ごそうか？ 晋一は、ベッドに横たわり眠ってしまった。

晋一の姿をモニターで見ていた女性に、最初に晋一と話していた

男が話しかけた。

「閣下。これでよろしいのですか？」

「はい……。」

「本当に？」

「いいのです。これ以上のことは出来ません。あの方の人生をこれ以上変えることなど……。」

女性は悲しそうに顔を伏せた。

「閣下。最後のチャンスです。今ならまだ間に合います。まだ彼を助けられます。このまま地球に戻れば3年後に凶弾に倒れるとわかっているのに……。」

「よいのです。もし、それを伝えたならば、どうなりますか？」

「しかし閣下……。」

「それを聞いた彼は、どうするでしょうか？」

「……。」

「彼には、気の毒ですが。彼は地球に戻って予定通りに結婚して、我々のために子孫を残してもらわなければなりません。」

「はい、ですから、その後にも……。」

「それは、できません。」

女性は、キツパリと言った。目には悲しみがあふれていた。

「これ以上、歴史を歪めることは許されません。彼は、聡明な人です。今後、世界と未来のために命果てるまで、あらゆる面で影響を残すでしょう。」

「肉体は滅んでも、彼の偉業は永遠に残るのです。」

「はい、私もそう思いますが、閣下の祖先をみすみす見殺しになど……。」

「見殺しなどではありません。それが彼の使命なのです。彼の決意にみなぎる目を見たはずです。」

女性は、晋一の姿を思い浮かべながら、自らに言いきかせるように言う。

「死に怯えて、何も為すことなく生き延びていくよりも。今を全力

で駆け抜けて行くことが生きるといふことだと思えます。」
女性と男の会話はしばらく続いていた。

晋一は、夢を見ていた。これまでのことが走馬灯のように駆け巡っていた。

少し寝苦しさをおぼえて目を開いた。

不思議なことに、何も無かった真っ白な部屋に窓が一つ現れていた。晋一は、もう驚くこともなく窓の方に目を向けた。

青い地球が見えた。

（未来は変わるのだろうか？）

青い地球を見つめながら、きつと変わるのだろうかと思った。

耳を澄ますと、あの小学5年の夏の日。未来人に天才にされた日。

あの日の蝉の鳴き声が聞こえてきたようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8304u/>

旧式頭脳

2011年7月19日03時46分発行